辞典類の選択・利用の実態と問題点

——司書講習受講生の場合を中心に——

醍　醐　光　子

An empirical analysis of dictionary selection, with reference to a librarian training course in Japan

Mituko Daigo

Ⅰ. 辞典研究の現況と辞典利用の実態

今日，いわゆる“日本語ブーム”と呼ばれ，国民の日本語への関心が高まってきている風潮は，学界においても指摘されるところである[①]。その傾向は，“日本語”から，“ことば”への関心に連なり，さらに，辞典・事典への関心へと広がってきていると思われる。辞典・事典類を対象とする研究が盛んになったのも近年の特徴である。その成果は，出版という形態で発表されたものに限っても，内容は多岐にわたり，辞典類の目録・解題書から辞典編集者の伝記などにいたるまで多種多様である。また，その読者も，一部研究者・図書館関係者などにとどまらず，層を広げたと思われる。最近の研究成果の出版動向を便宜的に，つぎのように大別し，若干の関係図書に触れてみたいと思う。a）目録，解題書[②]。b）全般的な辞典研究（エッセイをふくむ辞典論，利用法など）。c）特定分野あるいは特定辞典の研究。d）辞典の復刻。e）その他。a）における『辞典の辞典』（佃実夫・稲村徹元編　文和書房　1975），『辞書解題辞典』（惣郷正明・朝倉治彦編　東京堂出版　1977）は，語学辞典に限らず，広く専門・特殊辞典をふくむ網羅性のある解題書であり，前者により，各分野における辞典類の全貌と相互の関係が把握できるようになり，後者により，個別の辞典の沿革が明確になった点で，その功績は大きい。b）の代表的なものに，『辞書の話』（加藤康司著　中央公論社　1976），『私の辞書論』（福本和夫著　河出書房新社　1977）がある。前著は，校正実務第一人者からみた辞典論であり，後著は，昭和初期の福本イズムの主唱者として思想界を風靡した著者の辞典による思想形成史をも展開する辞典論である。c）に属するものとしては，『百科事典の整理学』（爾吉光長著　竹内書店　1972），『百科事典操従法』（梅棹忠夫ほか著　平凡社　1973）や，『英語の辞書の話』（加島祥造著　講談社　1976），『英語辞書の知識』（佐藤弘著　八潮出版社　1977）などがある。辞典編集者の伝記としては，大槻文彦について，『ことばの海へ』（高田宏著　新

潮社 1978), "The Oxford English Dictionary" の James A. H. Murray に関して,『ことばへの情熱』(エリザベス・マレー著 加藤知己訳 三省堂 1980) などが刊行されている。[3] d) の復刻も,語学辞典に限らず,各種の専門辞典にも及び,いちだんと目覚しいものがある。また,国語辞典の逆引辞典が,相次いで刊行されたことも,注目すべき動向と言えよう。[4] なお,種々の雑誌が,さまざまな角度から辞典特集を組み,[5] 連載ものを組んでいるのも,辞典研究の活発な動きと一般の関心の高まりを反映していることになろう。

このように,辞典研究がいちだんと活況を呈しているなかで,辞典類の選択の基準,利用のあり方,あるべき姿について,多くが語られ,論じられてきたと思う。では,現実に,辞典類が,いかに選択され,購入され,利用されているかという実態を知ろうとしたとき,これらの実態報告や分析を主題とする文献が意外と少いことに気づき,驚いたのである。私自身,十年余の公共図書館歴を経た後,女子短期大学図書館勤務もすでに5年を経,たとえば,女子学生の辞典類の利用状況を,感覚的にある程度把握し得たとしても,その選択・利用実態にどのくらい迫ることができるかは,むしろ疑問である。組織的な実態調査の必要を感じつつ過ごす昨今なのであるが,最近,私は,愛知学院大学司書講習会において,比較的若い人たちの"辞典体験"を直接見聞する機会を得,[6] 彼らの,辞典の選択・利用に関するデータを収集することができたので,以下,その収集のデータを中心に,辞典類の選択・利用の実態を報告し,問題点をも究明してみたいと思う。

Ⅱ. 受講生の辞典類の選択・利用に関する調査の概要

(1) 課題小論文「私の辞書・辞典」出題の趣旨と内容

前述のように,私は,愛知学院大学司書講習会,昭和53～55年度において,「参考業務演習」(30時間,1単位)を担当し,各年度8月中旬,約一週間の集中演習をおこなった。受講生には,夏期約2ケ月間の講習会全科目の『受講要項』があらかじめ配布されるが,その要項に,私は,演習の最終時限に,課題小論文「私の辞書・辞典」の提出の要を記し,小論文作成要領として,つぎのような説明を付しておいた。「各自,日常的によく利用し,慣れ親しんでいる辞書・辞典類のなかから一つを選び,それを選んだ理由,その図書の概要,特色,長所,短所などをあらかじめ検討しておくこと」。

このような小論文を課した目的として,私は,つぎの3点を考えていた。まず,各自の身近な辞典類をレファレンスブック=参考図書として再認識して欲しかったこと。つぎに,参考業務演習の成果として,レファレンスブックを観る眼がどれほど身についたかを知りたかったこと。さらに,辞典類の選択・購入・利用の動機や方法などを記述してもらうことによって,受講生と辞典類との出会いやかかわりあいを知っておきたかったことの3点であった。第3の目的に重点を置くならば,より適切な設問がなされるべきであったし,形式としても,小論文とは別の配慮が必要であったと思われる。したがって,最良のデータが収集できたとは思われ

ないが，まずは稿を進めたいと思う。

(2) 受講生の構成

受講資格は，短大・旧専門学校卒業以上，大学に2年以上在学し，62単位以上修得した者，司書補で2年以上の実務経験を有する者のいずれかの該当者であればよく[7]，参考業務演習の，昭和53～55年度（以下1978～80年と記す）受講生の構成は，470名中，233名が四年制大学の在学生であり，うち177名が女子。図書館関係勤務者は全体の約10%で，現職者への司書資格授与，再教育機能を果すためにスタートしたこの種の講習会の役割も[8]著しい変貌をとげ，女子学生の資格志向に大きく支えられているのが，現実である。これらは，大学における司書課程にも共通の問題であり[9]，司書養成制度，司書の専門性にも大きくかかわるので，いまここでは，触れまい。さらに，短大，大学卒業後就職していない女子，育児を終えた主婦らの受講も目立っている[10][11]。

Ⅲ．「私の辞書・辞典」にあらわれた辞典利用の実態

(1) 概要

「私の辞書・辞典」のなかで，受講生が取上げた辞典類を類別してみると，**表1**のようになる。表中「不明」としたなかには，特定の辞典名をあげずに一般論の記述，辞典名のみの羅列，無記入の者などをふくむ。3年間で，国語辞典を選択した者201名，43%，英和辞典101名，22%，両者をあわせると全体の3分の2を占める。他の語学辞典をもふくめると約87%に及び，百科事典や各種の専門辞典の占める割合が低い。学生と社会人との相異が数として出ているのは，特殊語学辞典ぐらいで，他に特徴と言えるほどの傾向は見られない。以下類別ごとに，若干の分析を試みたいと思う。

表1　選択辞典の類別分布　　（　）内の数字は学生の内数を示す

類別＼年度	1978	1979	1980	3年間計
百科事典	2	4(3)	4(1)	10(4)
専門辞典	16(9)	19(7)	11(4)	46(20)
哲学・宗教	4(2)	1	1	6(2)
歴史・地理	3(2)	4(1)	2(1)	9(4)
社会科学	7(4)	8(4)	5(2)	20(10)
自然科学		2	1	3
芸術		2(2)	1	3(2)
文学	2(1)	2	1(1)	5(2)
日本語関係	76(37)	84(38)	121(59)	281(134)
国語辞典	47(22)	67(30)	87(39)	201(91)
漢和辞典	13(10)	7(4)	8(6)	28(20)
現代用語の基礎知識	9(2)	3(2)	4(2)	16(6)

実用辞典	5(1)	4(1)	6(3)	15(5)
古語辞典	2(2)	2(1)	6(5)	10(8)
ことわざ辞典			4(2)	4(2)
外来語辞典			3(1)	3(1)
アクセント・表現辞典など		1	3(1)	4(1)
英語関係	32(15)	35(20)	48(29)	115(64)
英和辞典	29(14)	31(17)	43(26)	103(57)
英英辞典	2(1)	2(1)	2(2)	6(4)
和英辞典		2(2)	2(1)	4(3)
語法辞典など	1		1	2
その他の外国語関係	4(3)		7(5)	11(8)
仏和辞典	1(1)		3(2)	4(3)
独和辞典	1		3(2)	4(2)
西和辞典	2(2)			2(2)
中日辞典			1(1)	1(1)
不明	3(3)		4	7(3)
総計	133(67)	142(68)	195(98)	470(233)

(2) 日本語関係辞典——国語辞典を中心に

＜実用辞典＞

表1の日本語関係辞典の部分において，『現代用語の基礎知識』のみが，個別の書名としてあがっているが，判断に苦しみながら，この個所に入れたことを示している。同書は，1948年10月，自由国民社から創刊され，以後年刊の雑誌形態をとり，その内容もユニークな編集で知られる広汎な時事用語辞典であるが，[12] 便宜上ここで扱うことにする。これを選択した16名の中10名は社会人で，内容の豊かさと便利さを強調する者が多い。一度利用してみて，他辞典にない便宜を受けた者が，利用者・購読者として定着したというケースが目立ち，選択に積極性が見られるのが特徴である。2，3年おきに定期購入していると記す者3，利用頻度の最も高いレファレンスブックとして活用しているという図書館関係者3，『広辞苑』との併用を記す者も2名いる。私もかって，「ヒーブ」という語がいつ頃から日本で使用されはじめたかを調べる必要があったとき，まだ関係図書が皆無であったため，同書がことのほか役に立ったことを体験したことがある。

本稿における＜実用辞典＞とは，和英併用，実用，日用，机上などの文字を書名に付する簡便な国語辞典のことをさす。国語辞典と実用辞典の差異は，用例・用法を示しているか否かにあるとみてよいであろう。実社会の一般人にとって辞典とは，「一冊ですべて間にあう」式の辞典[13]や「和英ペン字入り新式辞典」をさし，[14]「ゾッキ本屋などに並ぶ，昔ながらの『実用辞典』といわれる素朴なものが根づよい愛用者をかち得ている」[16]現実を忘れてはならないと思う。表1において，「実用辞典」として登場した辞典名と選択者数はつぎの通りである。『集英社広

辞典』4，『講談社現代実用辞典』3，『旺文社国語実用辞典』2，『清水書院日用字典』2，『誠文堂新光社机上辞典』『高橋書店模範新辞林』『同ポケット日用語字典』『集英社新修実用辞典』各1名。これは，現在刊行中のこの種の実用辞典の点数や発行部数，普及の度合に比べると，むしろ少い方ではないだろうか。大学生が大半を占め，司書資格取得希望者という受講生の特殊性が反映している場面ではないかと思われる。

＜国語辞典＞

表2　国語辞典・辞典名別選択状況　　（　）内は学生の内数を示す

辞典名＼刊行年ほか	最新版 語数	最新版	初版	1978	1979	1980	3年間計
岩波広辞苑	20万	第2補訂'76	'55	13(5)	23(10)	21(8)	57(23)
三省堂 新明解国語辞典	(7.2) 6.8	(第3 '81) 第2 '74	'43	11(7)	7(4)	16(10)	34(21)
角川国語辞典	7.5	新 '69	'56	9(5)	6(1)	13(5)	28(11)
岩波 〃	5.9	第3 '79	'63	6(2)	8(4)	9(4)	23(10)
旺文社 〃	7.6	(新 '80) 新訂 '73	'58	2(1)	7(5)	7(1)	16(7)
三省堂 〃	6.2	第2 '74	'60	2	4(1)	6(4)	12(5)
小学館 新選国語辞典	7.8	新 '74	'69	3(1)	2(2)	3(3)	8(6)
講談社 国語辞典	7.3	改訂増補 '73	'66		1	5(1)	6(1)
〃 〃 (文庫版)			'79			1	1
新潮 〃	13.8	改訂 '74	'65		2	2(1)	4(1)
冨山房 大言海	10	新訂 '56	1891		1		1
小学館 日本国語大辞典	44		'72～'76		1		1
学研 国語辞典	4.7	改訂新 '76	'67		1(1)		1(1)
角川国語中辞典	15		'73		1		1
三省堂 新小辞林	5.1	第2 '75	'59		1(1)		1(1)
〃 辞海	13	新装 '74	'52			1(1)	1(1)
清水国語辞典	7	(修訂6 '81) 修訂5 '73	'69			1	1
三省堂 広辞林	16	第5 '73	'07			1(1)	1(1)
不明				1(1)	2(1)	1	4(2)
計				47(22)	67(30)	87(39)	201(91)

選択された国語辞典の内訳は，**表2**のようになる。なお，以下の表においては，版次をすべて無視し，辞典名のみによって処理している。「不明」とあるのは，辞典名が特定しない場合，羅列してある場合などをふくむ。調査時において未刊の最新版は，（　）内で示した。

一般に，国語辞典の類別の仕方には，いくつかの基準が考えられる。体裁・収録語数などによる規模別，収録対象・範囲――古語・漢語・外来語・固有名詞の扱い方による別，見出語のかな遣いや表記による分け方，さらに，一項目に盛込む記述内容から分ける方法などがあろう[16]。かって，『言海』の編者大槻文彦が，近代的辞典が備える五要素として，発音，語別，語源，語訳，出典のみをあげ，『言海』に音調＝アクセントの表示のないことを非難されている

が[17]，アクセントをあわせた，これら六つの要素は，現代にも通用する基本的な要素であることにかわりがない。前述の種々の類別の基準やこれらの要素を軸に，選択した一冊の国語辞典を各自吟味することを受講生に要求したかったのであるが，多くは漫然とした感想文となってしまったようである。

表2に見られるように，中型辞典である『広辞苑』が第2位を大きく引離しており，上位がほとんど小型辞典で占められているなかにあって，特異な存在と言えよう。『広辞苑』選択における目立った傾向は，他辞典との併用を明記している点である。『広辞苑』を主に他辞典を併用している者が12名，ちなみに国語辞典を選んだ者全体を通して他辞典において『広辞苑』併用を明記した者も12名に及んでいる。その理由は，『広辞苑』は百科事典的要素が強く，収録語数・範囲において他に優るが，ハンディでないという点に集約される。選択した社会人のなかの14名が図書館関係者であったことも，一つの特徴であろうか。なお，版次に関して言えば，第1版（1955）7，第2版（1969）27，第2補訂版（1976）12，不明11名となり，利用開始あるいは購入時期を明記している者の内訳は，高校時代9，大学時代3，中学時代2名である。この両者の数字を照合してみると，新しい版次のものが流布するには，かなりの年月を要することを示している。なお，利用開始・購入時期に触れて，選択の動機として，自発的な選択を明記している者はなく，家族，教師，友人のすすめによるとした者がそれぞれ，5，4，1名，プレゼントによる者が4名という数字が出ていることを付記しておこう。

『新明解国語辞典』は，学生・社会人の比率が，第1位の『広辞苑』の場合とは逆になり，学生の選択が約3分の2を占める。さらに特徴的なことは，学生・社会人を問わず，利用開始・購入時期と選択のパターンがかなり画一化していることである。すなわち，小学校上級から中学・高校入学時期に，学校の指定辞典あるいは教師のすすめという形で購入したと明記する者が9名あり，国語科教育における辞典指導の一端を伺い知ることができよう。この辞典の長所と言われる，現代的かな遣い，アクセント表示に関して積極的に触れる者が少いのは意外であったが，語釈が平明・的確であることを，具体例をあげて，『広辞苑』より優れていると評価する者があったのは印象的であった。版次を明記している者は，改訂版（1972）13，第2版（1974）3名で，受講時より遡って6～8年前に入手，その後も利用し続け現在にいたっているというケースが多いと思われる。『広辞苑』『新明解国語辞典』の利用・購入動機は，大方他律的要素が強く，自主選択には連ならない点において共通していると言えよう。

『角川国語辞典』においては，『広辞苑』との併用を明記する者が4名おり，さきの『広辞苑』を主に，この『角川』を従的に併用する者3名をあわせると，併用が最も多い辞典となる。この現象を，目的にあわせて使い分けていると理解すれば，積極的な利用姿勢を読みとることができる。『岩波国語辞典』においても，同様の傾向が指摘できる。

一般の国語辞典にも，古語は，当然ある程度収録されており，中型辞典と呼ばれるものはもちろん，『角川国語辞典』『講談社国語辞典』『三省堂国語辞典』などの小型辞典にもかな

りの配慮がなされている。が，専用の「古語辞典」を選択した者の内訳は，『岩波古語辞典』5，『小学館新選古語辞典』2，『三省堂明解』『旺文社』『角川』の古語辞典，各1となり，計10名を数えている。そのうち8名が学生で，6名が国文専攻という結果もうなずける。

つぎに，漢和辞典を選択した者は28名，そのうち20名が学生で，当然のことながら，国文学中国文学専攻の学生が必要に迫られ，選択にいたったケースが目立つ。『角川新字源』への集中度が高く8名，『角川漢和』4，『旺文社漢和』3，『大修館新』『小学館新選』『三省堂明解』漢和辞典が各2，『三省堂携帯新漢和』『集文館新漢和』『清水漢和』『誠文堂新光社筆順部首机上漢和』『講談社大字典』各1と続く。学生生活のみならず，現代社会生活における漢字・漢語の位置は，かつてのそれとは，大きな距りがある。当用漢字，教育漢字の定着，“活字離れ”と呼ばれる風潮などが作用しあって，漢和辞典の役割・必要性は，近年とみに後退してきていることは紛れもない事実である。この小論文において，漢和辞典を選択した学生も社会人になれば，国語辞典や実用辞典に移行する可能性を多分に持っているではないかと思われる。

(3) 英語関係辞典——英和辞典を中心に

表3　英和辞典・辞典名別選択状況　　（　）内は学生の内数を示す

辞典名 ＼ 刊行年ほか	最新版 語数	最新版	初版	3年間計
研究社　新英和中辞典	6万	4訂 '77	'67	31(20)
三省堂　新クラウン英和辞典	4.8	第4 '77	'54('39)	12 (4)
〃　新コンサイス　〃	9	第11 '75	'22	12 (8)
旺文社　シニア　〃	4.3	新訂 '76	'64	7 (5)
〃　英和中辞典	10		'75	6 (2)
〃　エッセンシャル英和辞典	9.3	携帯 '79	'40	6 (1)
学研　アンカー　〃	4.2		'72	5 (3)
三省堂　ディリーコンサイス　〃	5.3	第4 '79	'57	4 (2)
講談社　英和辞典（含ニューワールド版）	9	第2 '77	'69	3 (2)
研究社　高校英和辞典	3.4	第2訂 '71	'65	2 (1)
岩波　英和辞典	6	新 '58	'36	2
小学館　ランダムハウス英和大辞典	27		'73～'74	2
研究社　新リトル英和辞典	3.5	第3 '58	'29	2 (1)
〃　新ポケット　〃	7.5	第3 '63	'47	1 (1)
〃　新英和大辞典	14	(第5 '80) 第4 '60	'27	1 (1)
〃　現代英和　〃	12.2		'73	1 (1)
三省堂　最新明解英和中　〃	3	新装 '79	'72	1 (1)
〃　カレッジクラウン英和　〃	10	第2 '77	'64	1 (1)
〃　ジェム英和　〃	3	第5 '69	'25	1 (1)
小学館　ダイヤモンド英和　〃	0.8	改訂新 '72	'68	1 (1)
旺文社　豆単	0.5	第7訂 '75	'42	1
不明				1 (1)
計				103(57)

受講生が選択した英和辞典は，**表3**の通りである。彼らの大半が学生であり，2～3年前には容赦なく受験戦争に巻込まれた経験を持っているであろう。受験に傾きがちな高校英語教育の一面が辞典選択にも如実に反映していると思われる。どんな英和辞典が選ばれているのか，その傾向を探るために，若干の分析を試みたいと思う。

現在，英和辞典と称するものは，何点ぐらい刊行されているのだろうか。『辞典・事典総合目録'80』によれば，和英との合冊ものをふくみ38点，さらに児童・学習参考書のなかに25点，計63点にのぼり，辞典協会の『1981年版優良辞典・六法目録』の「英和辞典」の項では，59点同じく『全国学校図書館協議会選定・1980辞典六法目録』の「英和」は41点を数える。表3に登場するのは，21点であり，第1，2位の3点への集中度が高く，それだけで，全体の半数以上になることも注目に値する。受講生の選択した英和辞典が，これまでの辞典研究の成果のなかでどう位置づけられているか，評価されているかを，まず探ってみよう。

『日本の参考図書・解説総覧』では，レファレンスブックとしての優れた機能に着目して，15点を選んでいるが，表3に全く登場しないつぎの5点がふくまれている。『岩波英和大辞典』『岩波熟語本位英和中辞典』『冨山房双解英和辞典』『冨山房大英和辞典』『三省堂ドウーデン図解英和辞典』である。

また，前述の『英語辞書の基礎知識』では「現在絶版のもの，見出し語50,000未満のものは原則として除き，特色あり，重要と思われる一般向きの英語辞書」を取上げて，英和辞典としては，つぎの14点を示している。初版戦前発行の『岩波熟語本位』『三省堂コンサイス』『研究社大英和』『大修館スタンダード』『岩波英和』『研究社新英和活用大辞典』の6点と，戦後発行の『研究社ポケット』『三省堂カレッジクラウン』『研究社英和中』『講談社ニューワールド』『岩波英和大』『研究社現代』『小学館ランダムハウス英和大』『旺文社英和中』の8点である。これらは，英語の専門家によって選ばれた，きわめてすぐれた英和辞典の一群と言えよう。表3のリストにはあらわれないのはつぎの4点である。(イ)『岩波熟語本位英和中辞典』（斉藤秀三郎著　日英社　1915，岩波書店　1936，1952。見出語数不明）(ロ)『大修館スタンダード英和辞典』（竹原常太編　大修館書店　1929，1959。6万語）(ハ)『研究社新英和活用大辞典』（勝俣銓吉郎編　研究社　1939，1958。連語20万）(ニ)『岩波英和大辞典』（中島文雄編　岩波書店　1970。11万語）。(イ) は，円熟した日本語による訳語をはじめ，すでにそのユニークな点が高く評価され[18]，「日本の英学史上の金字塔的」作品とされ[19]，英語教育関係者，研究者必携の書とされている。(ロ) は，単語の頻度数統計を取入れ，10段階に分けて重要度を明示した最初の辞典であり，(ハ) は，連語＝colocation を組織的に並べ，生きた英文を例示している点で画期的であり，(ニ) は，ことばの発音・語義・成句・語源などの説明に意を尽した点において優れ，以上の4点は，いずれも，専門家の評価が高い英和辞典である点で興味深いものがある。受講生の選択の基準とこれらとのギヤップはどこに求めることができるであろうか。この点について，南出康世が，英和辞典のタイプを三つに大別し，つぎのような分析をしてい

るのが参考になろう[20]。的確な訳語・訳文の提供を専らの使命とする語義中心型と，語義に加えて，可算・非可算，文型，語法注記などを付記し，語の連用の仕方まで指示する学習辞典型と，いわゆる携帯用型とがあり，第一のタイプを老舗とすると，第二のタイプはいわば新興勢力で，利用者も圧倒的に若い世代が多いと指摘している。ちなみに，表3の10位までのなかで，第一のタイプの語義中心型は，『新コンサイス』『エッセンシャル』『講談社英和』の3点にすぎず，他は学習辞典型か携帯用型である。前述の(イ)～(ニ)の4点中3点は，いずれも語義中心型に属しているのである。

このように，学習辞典型が圧倒的に優勢であるのは，受講生の大半が学生であることにもよるが，小論文の内容から，利用開始あるいは購入時期，動機などを探ってみると，さらにその傾向があきらかになる。1位『研究社新英和中辞典』は，高校からの利用を明記する者14，うち教師のすすめ，学校の指定辞典であったからとする者8，大学からとする者が4で，全員が『研究社新英和大辞典』，英英辞典などとの併用を明記している。たしかにこの中辞典は，収録語数6万，可算・非可算，文型表示など種々の配慮がなされ，学習辞典として優れているので，高校の英語教育の現場での評価が高まったと思われる。大学の英語教育の現場からは，収録語数がやや不足とする見方もされているが[21]，『英語教育史資料』において，戦後発行の唯一の英和辞典として取上げられているのは[22]，その学習辞典としての特色に着目したからであろう。

2位として三省堂の『新クラウン』『新コンサイス』が並ぶ。それぞれ前者は1939年，後者は1922年の初版に遡ることができ，伝統のある辞典ということができる。購入動機などをみると，学校や教師のすすめによることはもちろんだが，家族，友人，塾教師，恩師のすすめによるなど，バラエティに富んでいるのは，1位のそれと対照的である。4～6位を占める三辞典は，いずれも旺文社発行のものであるが，それぞれかなりの特色を有する辞典である。『英和中辞典』は『エッセンシャル』の延長上にあるが，大学生，社会人，専門家の利用にも堪え得る実用性を備えている点で優れ，刊行後まもないにもかかわらず，かなり普及していることが推測される。また，海外旅行への携帯が，みずからの“一冊の辞典”の契機となっている例など，現代の青年層の一面をあらわしており，興味深く思われる。

辞典選択の大きな要素となるべき，中・高等学校，大学における英語教育の現場では，どのような辞典指導がおこなわれているのだろうか。最近発行された数種の英語科教育法関係の文献を見ても，辞典指導を積極的に取扱っているものは少く，やや心細い状態と言わざるを得ない。が，そのなかで，「全般的に言うと，わが国の中学・高校における辞書指導は，きわめて野放しになっていると断言できそうである」と嘆き，「授業削減の時代を迎えて，自主的学習態度を養うことがますます必要になっている今日，辞書指導を遅くとも（中学の）2年のはじめから，年間指導計画の中に組入れること」を提唱し，辞書は一生の教師であると強調する著者[23]や英語辞典の使い方・買い方までの具体的な指導の提案と実践をしている高校教師のことば

は，貴重な存在である[24]。英語教育雑誌には，つぎのようなエピソードが載る昨今である[25]。地区の中高連絡協議会の席で，高校に入ってくるまで一度も辞書をひいたことがない生徒がいるから，中学でなんとかして欲しいという高校側の発言に，中学校側は無言。中学指導主事が最後に答弁することには，学習指導要領には辞書指導をすることができるとあり，してもいいというのであって，しなくてはいけないとは書いていない，と。1981年4月から施行の「中学校指導要領」には，「してもよい」という“取扱い”すらも消えてしまっている現在，英語教育における辞典指導の将来にはあまり期待できそうにもない[26][27]。

1980年代に入って，英語の辞典界では，まず，20年ぶりに改訂がなされた『研究社新英和大辞典』の第5版の刊行が話題を呼び，80年11月には，小学館があらたな構想のもとに『英和中辞典』を発売し，81年2月には，岩波書店が『新英和辞典』を発売し，各出版社の小・中型英和辞典が出揃った形で，その競争はますます激化の様相を呈している。こうした現象自体は歓迎されるべきことかもしれないが，購入者・利用者の大半は，生徒・学生であろう。前述のように，辞典指導の行届かない教室の彼らは，出版社にとって格好の市場であり，売込みの激化が彼らを混乱させることにもなりかねない。辞典指導の充実や強化は，たしかに，選択の画一化などの弊害をともなうこともあろう。しかし，辞典を知り，利用する力を身につけさせる基本的な辞典指導の必要性は誰もが認めるところであろう。教育の現場での教師や図書館関係者の辞典指導への努力は，今後の重要な課題であることを自覚しなければならないと思う。

(4) 百科事典および専門辞典

百科事典を選択した者は，全体で10名，約2％を占めるにすぎない。百科事典の一般家庭への普及が喧伝されているわりには[28]少いというのが，最初の印象である。事典名別の内訳は，学研『原色現代新百科事典』（1967～68，10巻）3，平凡社『国民百科事典』(1961～62，7巻)『世界大百科事典』（1964～68，26巻）各1，『ブリタニカ国際大百科事典』（1972～75，28巻）1の大型事典のほかに，学研『新世紀百科事典』(1978，1巻)，講談社『現代世界百科大事典』（1971～72，3巻）各1が選択されている。なお，家庭における百科事典の備付・利用の好ましいパターンの一つとも言える[29]，大型百科事典の必要巻のみの利用方式を実行し，小学館『万有百科大事典』(1973～76，24巻）の「植物」の巻，講談社『新家庭百科事典』(1975，12巻）の「エチケット・美容・手紙」の巻のみを選択した者が各1いたことは興味深い。

つぎに専門辞典を選択した者が，受講生の約10％あり，学生の占める割合は必ずしも高くない。選択した社会人の多くは，学生時代によく利用し，愛着があるとして，いわば郷愁にも似た気持を大切にしている傾向が見受けられる。学生がみずからの専攻に密着した専門辞典を，職業人が現在の実務の必要から利用する専門辞典を選択する例が予想に反して少かったことは，どう理解すべきだろうか。

分野毎の分布は，表1の通りであるが，社会科学の分野が最も多く，なかでも六法・法学関係7，経済・経営・会計関係6が目立ち，人文科学の分野では，歴史関係8が多い。専門情報

機関に勤務する者が，最も利用するレファレンスブックとして，"The World Almanac and Book of Facts" を選んでいたが，語学関係辞典を除いて唯一の洋書であったので印象に残っている。

Ⅳ. 利用教育の重要性

500名弱の司書講習受講生の辞典の選択・利用の実態を，小論文の記述から概観し，さらに「参考業務演習」全般を通じて，受講生の示す辞典の利用状況を知るに及び，痛感することはやはり「利用者教育」の必要性である。一般に図書館の利用教育研究は，1970年代に入って定着と多様性を見せ，著しい進展を示している[30]。が，図書館・図書館学関係者からのアプローチに傾きがちで，たとえば参考図書の利用教育にしても，各教科や専門科目の学習指導と密接な関係においてスタートすることが見落される傾向にありはしないだろうか。私自身も，司書講習受講生における辞典利用の指導には，苦慮するところであるが，より実践的な，より具体的な方法論の確立が望まれるのである。多くの受講生に共通して言える特徴は，まず，辞典類の評価の基準，着眼点に留意することができず，同種の辞典の相対的評価の姿勢に欠ける点にあり，利用した辞典の書名・版次すら正確に記録できなかったり，偶然に接し得た一つの辞典の記述に固執する例が多い。せっかく同種のいくつかの辞典にあたりながら，それらを並列的にしか受けとめることができない者も多い。つぎに，辞典との出会いや選択が主体的か否かを問わず，利用が一面的で，活用する積極性にも欠ける。さらに，辞典・辞典以外の書誌などの参考図書・図書や雑誌論文等の文献自体という三者の有機的な関連が理解できず，検索や調査を発展させることができない。これら三つの弱点のうち，少くとも前二者は，学校教育における辞典の基本的な利用指導によって十分克服できる性質のものと思われる。が，大学入学後においても，こうした辞典利用の姿勢をたださされる機会を持つことのない学生が大部分のようである。辞典利用における，より確実な，より有効な指導方法への努力が急務と言わねばならない。そういう意味で，『図書館における調査と研究・大学生のための入門書』（小林矩子著 蒼文社 1978）のように，具体的な主題や身近なエピソードに即して図書館，参考図書その他の資料についての知識や利用方法が展開されている入門書の出現は，意義深い。また，近く，日本図書館研究会編刊になる『大学生と図書館』の刊行も予定されており，期待は大きい[31]。

辞典出版における種々の新しい試みや地道な改訂作業の動きが，いちだんと活発になってきている昨今，一般利用者の辞典利用の質的な向上は，専門家による辞典研究と相俟って，次代のよき辞典作りに大きく寄与するにちがいない。拙稿が，その利用指導や利用の質的向上にいささかでも役立てば幸である。(1981・4・30記)

〔注・引用文献〕

1. 見坊豪紀 「日本語ブームの回顧と展望」『辞書と日本語』 玉川大学出版部 1977 pp. 181～

193。吉田金彦 「(展望)国語学」 『国語年鑑 1979』 秀英出版 1979 pp. 17～18。 千野栄一 「(展望) 言語学」 『国語年鑑 1978』 秀英出版 1978 pp. 20～22。

2. 出版年鑑編集部編 『辞典・事典総合目録 '77,』 『同 '80』 出版ニュース社 1976, 1979。日本図書館協会出版委員会編 『参考図書の選び方』 日本図書館協会 1979。日本図書館協会編刊 『日本の参考図書解説総覧』 1980。

3. 上野景福 「ウェブスター伝と辞書」 『学鐙』 1980. 9 pp. 12～15。

4. 田島毓堂・丹羽一彌共編 『日本語尾音索引・現代語編・古語編』 笠間書院 1978, 1979。風間力三編 『綴字逆列語構成による大言海分類語彙』 冨山房 1979。

5. 「特集・辞典の歴史と思想」 『思想の科学』 1976. 6, 「特集・辞書の話」 『翻訳の世界』 1977. 4, 「特集・辞書づくりと辞書の活用」 『三省堂ぶっくれっと』 1978. 2, 「特集・辞書」 『月刊ことば』 1978. 3, 「特集・辞書を考える」 『日本語』 1978. 5, 「特集・辞書とことば」 『国語科通信』 1979. 2, 「みんなが使っている辞典と事典のベストはこれだ」 『特選街』 1979. 5, 「特集・辞書の世界」 『言語』 1980. 5, 「ブックガイド 81・知の事典」 『朝日ジャーナル』 1981. 3. 25. 臨増, 「特集・こんな便利な辞書があった!」 『翻訳の世界』 1981. 4, 「特集・英語の辞書」 『英語青年』 1981. 4。

1975年以前の特集などの関係文献はつぎの2点を参照。見坊豪紀 「日本語の辞書 (2)・参考文献」 『岩波講座日本語第9巻』 岩波書店 1977 pp. 364～369。 勝又美佐子 「辞典・事典に関する参考文献」 『思想の科学』 1976. 6, pp. 201～207。

6. 文部大臣委嘱愛知学院大学司書講習会, 昭和53～55年度。毎年7～8月実施。

7. 図書館法施行規則第2条 (1968, 文部省令5号改正)。

8. 菅原春雄 「我が国における図書館学教育の発展について」 『文教大学女子短期大学研究紀要』 21 (1977) p. 53。 同 「司書講習の史的考察」 『同紀要』 22 (1978) p. 70。

9. 伊藤松彦 「司書資格と図書館」 『出版ニュース』 1980. 5. 下旬 p. 16。

10. 受講生の構成の内訳は, 各年度受講者名簿の勤務先あるいは, 出身ないしは在学大学名などにより判断した。

司書講習会 (参考業務演習) 受講生の構成

	1978	1979	1980	3 年 計
学　　生	67(46)	68 (53)	98 (78)	233(177)
社　会　人	66(43)	74 (47)	97 (78)	237(168)
(図書館勤務者)	17 (7)	20 (12)	17 (12)	54 (31)
計	133(89)	142(100)	195(156)	470(345)

(　) 内は女子

11. 松浦総三 「『現代用語の基礎知識』 の30年」 『出版ニュース』 1978. 2. 下旬 pp. 4～8。

12. 桃山学院大学における, 司書・司書補講習の概要はつぎの資料に詳しい。ちなみに, 1968～75年夏期講習受講生639人中, 学生185人 (29%), 社会人454人 (71%) 中, 図書館勤務者229人で全体の43%を占めている。 長谷川俊英 「司書・司書補講習における図書館員養成」 『昭和四十年代における図書館・図書館学の進歩』 日本図書館研究会 1976 pp. 72～78。

13. 磯貝勝太郎 「国語辞典の比較検討」 『参考図書の選び方』 日本図書館協会 1979 p. 262。

14. 見坊豪紀 「日本語の辞書 (2)」 『岩波講座日本語第9巻』 岩波書店 1977 p. 346。

15. 「編集後紀」 『言語』 1980. 5 p. 128。

16. 松井栄一 「現在刊行中の国語辞典」 『言語』 1980. 5 pp. 65～71。

17. 注 (14) p. 332。

18. 大村喜吉 『斎藤秀三郎伝・その生涯と業績』 吾妻書房 1960。 枝松栄 「斎藤秀三郎と『熟

語本位英和中辞典』」　『思想の科学』 1976.6 pp. 20～27。
19. 佐藤弘 『英語辞書の知識』 八潮出版社　1977　p. 153。
20. 南出康世 「現在刊行中の英語辞典・事典」　『言語』 1980. 5　pp. 72～80。
21. 上野景福 「英語の辞書・新入の大学生のために」　『学鐙』 1977. 5　p. 8。
22. 「英語辞書小史」　『英語教育史資料4』 東京法令出版　1980　pp. 88～99。
23. 佐藤秀志 「辞書指導の実際」　『現代の英語教育9』 研究社出版　1978　p. 130。
24. 戸田豊 「辞書指導・買い方から使い方まで」　『英語教育』 1978. 3　pp. 34～36。
25. へくせでたあ 「かなしき主事」　『英語教育』 1977. 11　p. 55。
26. 「中学校学習指導要領」(1972, 4.1 施行) の英語2学年の「内容の取扱い」には,「内容(1)のイ（＝読むこと）に関連して，英和辞書の引き方を指導してもよい」と記されていた。山崎秀夫「辞書使用の指導」　『英語教育』　1969. 9　pp. 26～28。
27. 「高等学校学習指導要領」(1982. 4. 1　施行) の第1英語Ⅰの「内容の取扱い」には，「辞書の使い方を指導し，その使用の要領を得させるようにする」とある。
28. 日本の全世帯の約20%が何らかの百科事典を購入しているといい（前掲『辞典の辞典』p. 33.）一般家庭でも百科事典は50%を越える保有率ともいわれるほど普及（前掲『1981年版優良辞典・六法目録』p. 2)，しているという。
29. 彌吉光長 『百科事典の整理学』 竹内書店　1972　p. 68。
30. 菅原春雄 「情報処理教育の課題」　『文教大学女子短期大学研究紀要』 24　(1980) pp. 11～20。
31. 1981. 6. 30. 刊。